18. 人間ドック受診者問診表の分析と考察

松本隆吾、百瀬文枝、平林和子
（医療法人慈泉会 相澤健康センター）

要旨：2007 年の当施設人間ドック受診者 13,068 人の問診表のうち、既往歴、服薬歴、自覚症状の傾向について分析した。その結果、服薬歴では男女各年代で高血圧や高脂血症の比率が高いこと、男性既往歴では水虫、痔、腰痛症の比率が高いこと、また自覚症状では男女ともに首筋のこりや目の疲れ、腰痛などが上位に入ることが分かった。これらより、受診者のさらなる QOL 改善に結びつく要素が存在することが分かった。

キーワード：人間ドック、既往歴、服薬歴、自覚症状、ＱＯＬ改善

Ａ．目的

人間ドック受診者の問診表に含まれる自覚症状、服薬歴、既往歴の項目を分析し、具体的な受診者像を描き出すことで、より広範な医療サービスを提供する手がかりを得ることを目的とする。

Ｂ．方法

①対象および期間

2007 年の一年間（1 月 4 日～12 月 29 日）に当健康センターの人間ドック（1 日および２日）を受診した 13,068 人を対象とした。

②方法

各受診者より提出された問診表のうち、既往歴 104 項目、服薬歴 20 項目、自覚症状 112 項目につき、男女別の 30 代から 80 代の各年代の回答比率を算出し、回答比率の高い上位項目の特徴を分析した。

③使用問診表

株式会社ハーディの『健診のためのおうかがい』を使用した。

Ｃ．結果

①既往歴について

表１に男女別各年代の既往歴上位５項目を示した。30 代から 50 代までの男性と 30 代から 60 代までの女性で花粉症に罹患する割合がいずれも３割前後と非常に高いことが分かる。また男性では 70 代までの各年代で水虫、痔、腰痛症に罹患する比率が高いことがわかる。一方女性では、30 代から 50 代までの貧血と 40 代から 60 代までの子宮筋腫に罹患する比率が高いことが分かり、いずれも女性ホルモンの変化との関連がうかがわれる。また男女ともに 60 代以上では高血圧症となる割合が年代を追うごとに増加し、あらためて高齢世代の高血圧症の存在が浮き彫りになった。また 70 代以降では男性で増加する前立腺肥大の割合や、男女に共通して白内障や緑内障などの眼科疾患が増加することも特徴である。

表1. 男女別各年代既往歴1位～5位

		1	2	3	4	5
男性	30代	花粉症 35%	水虫 15%	鼻アレルギー 12%	腰痛症 10%	痔 9%
	40代	花粉症 32%	水虫 24%	痔 16%	腰痛症 12%	腎結石(尿管) 10%
	50代	水虫 27%	花粉症 25%	痔 23%	腰痛症 20%	高血圧 18%
	60代	高血圧 28%	水虫 28%	痔 26%	腰痛症 22%	大腸ポリープ 21%
	70代	高血圧 35%	痔 25%	大腸ポリープ 24%	水虫 24%	前立腺肥大・腰痛症 23%
	80代	前立腺肥大 50%	高血圧 43%	腰痛症 38%	白内障 28%	難聴 28%
女性	30代	花粉症 35%	じん麻疹 15%	鼻アレルギー 14%	貧血 14%	ｱﾄﾋﾟｰ性皮膚炎 13%
	40代	花粉症 43%	貧血 19%	じん麻疹 16%	子宮筋腫 16%	膀胱炎 15%
	50代	花粉症 35%	子宮筋腫 23%	腰痛症 20%	貧血 17%	膀胱炎 17%
	60代	腰痛症 23%	花粉症 22%	高血圧 21%	子宮筋腫 21%	頚腕痛 20%
	70代	高血圧 35%	白内障 32%	腰痛症 24%	膀胱炎 22%	頚腕痛 20%
	80代	高血圧 63%	白内障 50%	狭心症 31%	膝関節症 31%	緑内障 25%

②服薬歴について

表２に男女別各年代の服薬歴上位５項目を示した。男性においては、30 代から 80 代の各年代において、高血圧症、高脂血症、痛風の治療薬の服薬比率が加速度的に増加することが特徴である。一方女性においては、高血

表2. 男女別各年代服薬歴1位～5位

		1	2	3	4	5
男性	30代	痛風の薬 2%	高血圧の薬 1%	高脂血症の薬 1%	糖尿病の薬 1%	喘息の薬 1%
	40代	高血圧の薬 6%	痛風の薬 4%	高脂血症の薬 4%	精神安定剤 2%	潰瘍の薬 2%
	50代	高血圧の薬 18%	痛風の薬 7%	高脂血症の薬 7%	糖尿病の薬 5%	潰瘍の薬 4%
	60代	高血圧の薬 31%	高脂血症の薬 11%	痛風の薬 9%	糖尿病の薬 7%	潰瘍の薬 6%
	70代	高血圧の薬 41%	高脂血症の薬 12%	痛風の薬 11%	潰瘍の薬 10%	糖尿病の薬 8%
	80代	高血圧の薬 43%	糖尿病の薬 15%	高脂血症の薬 15%	利尿剤 13%	痛風の薬 8%
女性	30代	漢方薬 5%	精神安定剤 2%	うつ病の薬 2%	貧血の薬 2%	ｽﾃﾛｲﾄﾞ剤 2%
	40代	漢方薬 3%	貧血の薬 2%	精神安定剤 2%	高血圧の薬 2%	睡眠剤 2%
	50代	高血圧の薬 10%	高脂血症の薬 6%	漢方薬 4%	潰瘍の薬 3%	精神安定剤 3%
	60代	高血圧の薬 21%	高脂血症の薬 18%	精神安定剤 6%	睡眠剤 6%	漢方薬 5%
	70代	高血圧の薬 36%	高脂血症の薬 17%	精神安定剤 13%	睡眠剤 8%	潰瘍の薬 6%
	80代	高血圧の薬 69%	精神安定剤 25%	高脂血症の薬 19%	不整脈の薬 19%	潰瘍の薬 19%

圧症、高脂血症の薬は 50 代から服用比率が上昇することが特徴である。またいずれの年代においても精神安定薬の服用率が高いこと、30 代と 40 代では貧血の薬の服用率が高いことも特徴である。また 30 代から 60 代までの各年代において漢方薬の服用が上位に入っていることも特徴である。

③自覚症状について

表 3 に男女各年代の自覚症状上位 5 項目を示した。女性の 80 代を除き、男女ともに、何れの年代においても眼鏡コンタクトレンズ等使用、首筋のこり、腰痛、疲れ目といった項目が上位を占めていることが注目に値する。

表3. 男女別各年代自覚症状1位～5位

		1	2	3	4	5
男性	30代	眼鏡等使用 52%	首筋のこり 32%	腰痛 23%	疲れ眼 22%	痔傾向(軽) 19%
	40代	眼鏡等使用 44%	首筋のこり 34%	疲れ眼 24%	腰痛 24%	痔傾向(軽) 19%
	50代	眼鏡等使用 38%	首筋のこり 33%	疲れ眼 28%	腰痛 28%	痔傾向(軽) 21%
	60代	眼鏡等使用 34%	首筋のこり 28%	腰痛 27%	疲れ眼 22%	痔傾向(軽) 20%
	70代	頻尿 28%	眼鏡等使用 28%	腰痛 28%	首筋のこり 27%	夜間頻尿 22%
	80代	眼鏡等使用 38%	頻尿 35%	難聴傾向 30%	腰痛 30%	夜間頻尿 28%
女性	30代	眼鏡等使用 56%	首筋のこり 56%	疲れ眼 30%	倦怠感 25%	立ちくらみ 23%
	40代	首筋のこり 55%	眼鏡等使用 47%	疲れ眼 30%	腰痛 27%	倦怠感 23%
	50代	首筋のこり 56%	眼鏡等使用 38%	疲れ眼 37%	腰痛 29%	倦怠感 21%
	60代	首筋のこり 48%	疲れ眼 33%	眼鏡等使用 32%	腰痛 30%	関節痛(1ヵ所) 16%
	70代	首筋のこり 46%	眼鏡等使用 34%	腰痛 31%	疲れ眼 29%	関節痛(1ヵ所) 25%
	80代	疲れ眼 44%	倦怠感 38%	難聴傾向 31%	関節痛(2ヵ所以上) 31%	眼鏡等使用 31%

また 70 代、80 代では男女いずれにおいても難聴傾向を自覚する率が高くなり、また男性では頻尿や夜間頻尿を訴える割合が多くなることが特徴である。また 30 代から 50 代の女性において倦怠感の項目が同年代の男性に比較して上位に入ることも特徴である。

D．考察

当施設は各種癌や心、脳血管障害の早期発見、あるいはメタボリックシンドロームなど生活習慣病の予防等の人間ドック業務に特化するものであるが、今回把握した受診者の傾向から、男女各年代のＱＯＬ改善に結びつく多様な要素が存在することが改めて分かった。

男性においては、早期からの運動や食事習慣の改善による痛風、高血圧、高脂血症の予防が生活習慣病の予防と老年期の健康な生活に結びつくという通説が改めて確認されたことに加え、水虫や痔、腰痛症などの疾患への対応も個人の QOL の改善につながる大切な要素と推測される。

同様に女性においても、早期よりの高血圧や高脂血症の予防が必要であることに加え、精神安定剤や睡眠剤服用の面からも精神症状改善のためのサポートが大切であることが分かる。また貧血や子宮筋腫など女性特有の疾患への対応も QOL 改善の要素であると推測される。

さらに自覚症状の傾向から判明したことは、各種疾患の早期発見、予防という視点に加え、健康で快活な生活をより多くの受診者が送る上で大切となる異なった切り口が提示されているものと考えられる。このことは、全国有数の長寿県でありながら、高齢者医療費が最も少ないとされる長野県においても、今後地域の特性にあった幅広い医療施策を検討する上で参考になるものと考えられる。